

◎行ごとに縦の中心線が通るようにします

平成24年度 全国硬筆コンクール課題参考手本

大平恵理書

(楷書)

<p>中一ニニニ</p>	<p>学年 氏名 幅に注意</p>	<p>そを聴きにゆく</p> <p>なめ ななめの方向を少しずつ変えて</p>	<p>駐車場のくごみの中に</p> <p>折り返す 右上りをていねいにそろえて</p>	<p>ふるさとの訛なつかし</p> <p>長め 短め 始筆は中心から 幅に注意</p> <p>方向に注意してはうづ</p>	<p>泣けとごとくには</p> <p>出ない 止める 止める 少しあげる 幅に注意</p>	<p>北上の岸辺目に見ゆ</p> <p>まっすぐ下へ あまりまげない なめに</p>	<p>やはらかに柳あをめる</p> <p>はねる 中心から 縦長に</p>
--------------	---------------------------	---	---	---	---	--	---

各学年を選んで下さい。

課題解説

啄木のふるさと

ふるさとは小説や詩歌の重要なテーマであり続けてきた。課題文の石川啄木の2首はその世界をよく表している。

岩手県の寺の子に生まれた啄木は函館、小樽などを転々とした末、文学への志忘れられず上京し、創作活動に苦闘した。1首目の「北上の岸辺」は郷里を流れる北上川のこと。その優しい緑の岸辺を心に思うとき、啄木の心はなつかしさに震えるのだ。

2首目。停車場にふるさとの言葉を聴きに行くのである。故郷への思いが胸を打つ。貧しさの中で結核を病み、志半ばで27歳の若さで人生を終えた啄木のなかで、ふるさとは、そして文学はどんなに大きな存在だったろうか。

幼年期を洪民村（現在の盛岡市玉山区洪民）で過ごしたが、故郷の美しい自然が心に残したものは大きい。短い生涯に口語を交えた生活詩や三行書きで表す短歌など多くの作品を残した。

\*訛（なまり）

角川学芸出版

「硬筆文字練習帳（実力養成編）」所収